生の哲学と政治観

——今井先生の思想と業績——

片山寿昭

シャルル・ペギイがベルグソンについて語っている論文の中につぎのような言葉がある。「信仰があり、愛があり、芸術があり、哲学があり、道徳があり、科学がある。そして、たしかにその他のものもあるだろう。さらに同時にもろもろの王国があるのみならずもろもろの地方もあると言わなければならないであろう。*」およそ人の思想の中にはそうした様々な側面がいつもふくまれていて、それらを残らず取出して並べてみることはほとんど不可能である。今井先生の思想のようにきわめて広い視野によって発想されしかも鋭敏で透徹した洞察にもとづく思想をこの与えられた紙幅の許す範囲ですべて語りつくすことはできない。先生の思想的行程もこれからその豊かさと輝きとをいよいよ増してゆくであろう。私はここで先生の業績と思想のごく限られた側面を、主として方法の問題を中心に取上げてみるだけである。

* Ch, Péguy, Note sur M. Bergson et la philosophie bergsonienne, *Oeuvres en prose 1909–1914*, éd. Pléiade, pp. 1259–1260.

一

「マイノンクの対象論」を卒業論文として一九三〇年同志社大学哲学科を卒業された先生は十年後に『フランス哲学の主要問題』*を公刊された。この処女作は、先生のその後の思想的発展の基礎となった根本的思考方式を含んでいる点で、その少し後のころにものされたと思われる論文「学統的体系」**とともにたいへん重要なものであろう。

* 一九四〇年刊。

** 『人間探究』所収、一九四七年刊。

まず最初に、順序は逆になるけれども「学統的体系」を取上げたい。哲学体系という言葉を聞いてまずふつうに人

が思い浮べるものはカントの哲学体系とかヘーゲルの哲学体系とかいわれるように、すぐれた哲学者によって生み出された思想の体系であろう。これは多くの場合、それぞれ哲学者の名によって呼ばれる。このような体系は個体的体系と呼ばれ、個性と独創性とがその特徴となっている。哲学史はまず個体的体系から個体的体系へと非連続的に推移するものと考えられる。

この第一の体系にたいして、理念的体系と呼ばれる第二の体系がある。これは、すべての個体的体系を、究極的にはただひとつの哲学を構成する必然的契機にすぎないものと考え、哲学史の流れ全体がただひとつの哲学体系であるとするものである。人類の哲学的努力は無限にこのような体系の完成を目指して進む。しかし、それはつねに未完のままにとどまり、現実の哲学体系ではない。したがって、理念的体系と呼ばれてよい。あるいは課題的体系と呼ばれてもよい。一方で個体的体系が有限で不完全たることをまぬかれないのと同じように、他方、理念的体系はけっして完結することのない悪しき無限をその特徴としている。前者は「完成をもたぬ閉鎖的体系」であり、後者は「終結をもたぬ開放的体系」である。このような二つの体系の中には真の体系にふさわしいものは見出だしえない。むしろ、第三の体系たる「学統的体系」と呼ばれるものの中に真の哲学体系が見出だれるのである。

では「学統的体系」とは何か。たとえばロックからヒュームに至るイギリス経験論、カントからヘーゲルに至るドイツ観念論を取上げてみるとき、そこにはそれぞれ一つの体系の発展が見られる。何人かの哲学者たちが相倚って一つの体系をつくり上げるのに協力したように見えるのである。このような意味の体系が、学統的体系にほかならない。哲学史は一般に学統から学統への非連続的推移を示すのである。

このような意味をもつ学統は、学派とは区別される。学派はいわば「一人の語る者と多くの聴く者との同時存在的関係」*において成立しているが、学統には二つ以上の中心がある。学統は「二つ以上の個体的体系をその構成的契機

とする直線的統一*」であり、「二つ以上の学派をその組成的部分とする円環的統一」である。理念的体系の中では哲学者の豊かな人格的個性がややもすれば見失われ、個体的体系の中にとじこもると哲学史の全体的関連が見落されがちになる。学統的体系は哲学者の個性と哲学史の全体を統一的に媒介すべき「種的体系」とも言われ、そこには両者の統一された形である「個性的全体」、「個性的普遍」が見られるのである。

* 前掲書一八―二〇頁参照。

学統的体系において、「創むる者」、「嗣ぐ者」、「仕遂ぐる者」の三者が区別される。たとえばドイツ観念論という学統に見いだされるカントのような「創むる者」は、伝統的にそれまで承認されて来た哲学を否定し、直接的な存在、認識以前の存在に立ちかえろうとする。彼はしばしば懐疑論的苦悶を経験する。それは、「去りゆく時代の認識」と「生れつつある時代の存在」との乖離の主体的な表現である。「創むる者」は去りゆく時代に背をむけて新しき時代を哲学的に語ろうとする。しかし、彼はそれをたんに荒削りに表現しうるだけであり、つねに非合理的残余が残される。カントにおける物自体、ロックにおける想定された不可知者はそれをあらわしている。これは学統を受けつぐ者に残された課題である。「嗣ぐ者」は「創むる者」の到達点を出発点とする。したがって、後者が存在から認識への道をたどったのに対して、前者は認識から認識への道をたどることになる。フィヒテ、バークリ、マールブランシュ等がかかる「嗣ぐ者」の役割りをそれぞれの学統において果した。彼らの特徴は純粋性と抽象性である。非合理的残余を体系の外へ押し出すことによって体系を純粋化すると同時に、この操作は観念論的抽象をともなう。かくして、「学統の歴史は創むる者において見出された一つの根源的原理が嗣ぐ者の個性と独創性とを介して次第に純粋化され徹底化されゆく歴史である」と言われる。この純粋化の過程の最後に、「仕遂ぐる者」という学統の完成者、たとえばヒュームやヘーゲルのような人々があらわれるのである。

「仕遂ぐる者」は「創むる者」が語りえなかった真の本領をその全き姿において表現する。学統の歴史、「創むる者」から「仕遂ぐる者」に至る歴史は「最初概念の即自態において把握された学統的精神が漸次に具体的に自己を発展せしめゆく歴史」である。学統的精神は学統を一貫して流れる超個性的原理である。しかし、学統的精神は個人の哲学者の個体的体系を通じて現実的にあらわれ、学統という個体的体系のいくつかの集りの中でその全き姿をあらわす。学統は「一方、自己のロゴス的完成を目ざすと共に、他方哲学者のパトス的契機を生かしうる余地を有たなければならない。*」

＊　前掲書五二頁。

かくして、学統的体系は哲学史全体（未来のそれをも含めて）と個人の哲学的所産との間の中間者であり、学統的精神はヘーゲル的な絶対精神と哲学者の個性との間の中間者である、と言うことができるであろう。このような考察方法は哲学史の方法論としてきわめて興味深いものであるが、それについて深く検討する余裕を今わたしは持たない。ただ、この中間者を求める行き方は、人間の問題を考えてみる場合、個人と人類との中間的存在である社会の問題をめぐって考察をすすめるという仕方になるであろう。この点で、「学統的体系」の思想と『フランス哲学の主要問題』における問題意識とはたがいに照応していると思われる。この最初の労作の中では、社会と個人、社会と道徳、道徳と宗教という三つの大きな問題をめぐって、デュルケム以後三十年間のフランス思想の発展が考察される。そのさい、「学統的体系」において展開された方法は、萠芽的な形で基盤となっていたと思われる。もちろん、それは明確な姿をとっていたのではなかった。少くとも外見上では、この二つの労作の間にはかなりのへだたりがある。しかし、『フランス哲学の主要問題』の中心問題が「社会と個人の弁証法」であり、「綜合を求める二律背反のすがた*」であると言われる場合、それは学統的精神の発展とある意味で共通点をもっているであろう。ここでは、社会と個人とが

相互に制約しあう仕方に関して、デュルケム、タルド、レヴィ・ブリュール、フレデリック・ロオ、ギュスターブ・ブロー、ベルグソン等の哲学者たちが取扱われる。これらの哲学者たちの間に、「創むる者」、「嗣ぐ者」、「仕遂ぐる者」の学統的関係を見ることはできない。しかし、それにもかかわらず、社会と個人という問題がデュルケムとタルドとにおける対立から「ベルグソン的綜合」へと至るまでの問題そのものの歴史という点からこの著作が構想されていることを重要視するならば、そこに「ロゴスの誘惑」**と呼ばれていい何ものかが働いていることはたしかであり、また社会という中間的なものが主として問題になっていることを考慮すれば、「学統的体系」とのある点におけるつながりもはっきりするであろう。いずれにせよ、この簡にして要をえた労作にくわしく立入ることができないのは残念であるが、ここでかなりの頁が割かれているフレデリック・ロオは、実存哲学的な思考のフランス的な一人の祖として近年再評価されんとしていることを附加しておかなければならない。

* 『フランス哲学の主要問題』序文参照。

** 『人間探究』五二頁。

二

論文集『人間探究』にはまた「基体的芸術」という一篇が収められている。そこでは、まず冒頭に「おのづから地に声ありて成りしもの数巻たかし読人不知」*という歌が引用されている。この大地の声がまさに問題となる。

作者不明の古代の歌、いや歌にかぎらず芸術一般が今もなお人を感動させることはしばしばある。そのような作品は、その作者が個人ではなくて恰もある時代そのものが作者であるかのような雰囲気をもっている。「一定の個性的主体にまでなお結晶せざる個性化以前の主体」**が作者であると言いうるような雰囲気をもっている。あるいは、そう

いった作品は、「種的・民族的基体とも云はるべき原始的意識の深層において、おのづから自然生成的に湧き上って来た芸術的所産」[**]であると言われていい性格をもっている。

* 『人間探究』二二〇頁。

** 前掲書二二一頁。

日本の万葉集の多くの歌にしても、西洋の伝説叙事詩にしても、何かそうした性格をもっていることはたしかであろう。かかる芸術を生み出すものは「基体的芸術意欲」と呼ばれる。それは「個体化の根底にあってそれ自身なお個体化されないやうな種的・民族的な芸術的衝動」[*]である。それはまた「原始的自然的な母胎」でもあり、あるいは「汎通的・滲透的な芸術衝動」とも言われる。基体的芸術の作者は、たとえ個人であっても、いまだ真の個性にまで至った個体ではなく、いわば種的人間の域にとどまっている個人である。「彼を通じて自己を表現するものは、なお彼自身にあらずして、却って彼のその中に融即的に生きる種的共同体の素朴な原始的な生命感情」[**]である。近代芸術の特徴の一つである主体的、個性的芸術へと高まろうとする上昇的傾向を一方でもちながら、まだはっきりとした主体化にまで結実していないものが基体的芸術であり、「人間の声たらむことを憧憬しながら、しかもなほ明瞭に人間の声にまで達することなき大地の声」[***]である。

* 前掲書二二二頁。

** 前掲書二二四頁。

*** 前掲書二二八頁。

では基体的芸術の意味はどこにあるか。それは個性的天才を生み出すべき母胎としての意味をもっている。個人の天才の主体的芸術も、「深く豊饒なる基体的大地」に根ざすことによってはじめて可能となる。「けだしすべての勝

れたる芸術の根底には、旺盛なる民族的芸術意欲が灼熱的に沸きたぎってゐなければならない」*からである。このように、個人を超えたところに芸術の根源が見出だされるとすれば、芸術的価値の超時代性という問題をとく一つの鍵がそこに存するかもしれない。

* 前掲書二二八頁。

「学統的体系」にあっては、学統的精神が三つの段階をたどってその発展を示したのであった。『フランス哲学の主要問題』では、社会と個人という問題の弁証法的発展が取上げられた。「基体的芸術」では個人の芸術意欲の根底でありその母胎である大地の声が浮き彫りにされた。このように見てくると、初期の先生は、個人の哲学的活動の奥にひそむ個人を超えた歴史的な流れ、あるいはその流れの基調を主として問題とされていたように思われる。言いかえると、無限と有限との間、人類と個人との間、神の芸術と人間の芸術との間等としてあらわれる中間的なるものがつねに念頭に置かれ、そういった両極の対立がこの中間的なものによっていわば綜合統一される一つの弁証法が先生の思想の根底に存していたのではないかとも思われるのである。しかし、これは一つの側面であり、ウイリアム・ジェームズの研究とベルグソンについての研究が同時になされていた点をも見逃してはならないであろう。

三

ジェームズとベルグソンに関する研究は、一九四七年と一九四八年にそれぞれ相前後して公刊された。その一つ『ウイリアム・ジェームズの哲学』の序文において、まず二つの叙述方法が区別されている。「高処からして一つの都会を鳥瞰する」ことにもたとえられうるような方法と、「地下鉄を利用して一つの都会を見物する」ような方法と。第一の鳥瞰的方法は都市全体を一望のもとにのぞむことはできるけれども、細部のくわしい点は無視されざるをえな

い。第二の地下鉄的方法は都会の全的眺望を与えることはできないけれども、「地下鉄の駅々に近い要処要処は、十分に細部にわたって、リアルに、具体的に捉えられることが可能である。*」ジェームズのような哲学者を取上げ、しかも彼の生きた思想をできるだけ直接に読者の前に示すためには、第二の方法がより適切であることは言うまでもないであろう。第一の方法によって示されるものは一様に稀薄にされた全体であり、ジェームズの用いている比喩にしたがえば、山海の珍味を悉くならべた、しかし単に印刷されたにすぎない献立表である。第二の方法は、たとえ貧しくともともかくリアルな鶏卵、リアルな乾葡萄のついた食卓に人を招くことである。

＊『ウィリアム・ジェームズの哲学』自序参照。

第一の鳥瞰的方法は、観察者と対象との距離が遠いだけに、主観の視力に左右されやすく、しばしば主観的な結果をもたらすことをまぬがれない。第二の地下鉄的方法は、全体が一度に与えられないうらみはあるにしても、少くとも細部は殆どありのままに客観的に示される。しかし、繊細な思想の襞にわけいってこまかく考察することは容易ではない。また、そのさい第一の全体的視野がまったく見失われてしまっているならば、細部のみをくわしく見ることは無意味となるであろう。だがこの著作の中に、第一の方法によるジェームズの哲学の全体が示されていないのではない。「真理と実在」という表題をもった第二章で紹介されているのはベルグソンの見たジェームズ哲学の全体の姿であるが、それはまさに先生のジェームズ観を代表するものと言ってもよいであろう。プラグマティズムといえば、人はなお「真理を物質的有用性に従属せしめる」浅薄な理論だと速断しがちである。そのような観方に強く反対する立場からベルグソンはジェームズの哲学の本質について語り、また今井先生も同じような立場に立ってジェームズを語ろうとされるのである。* 第二の地下鉄的方法が有効に用いられるためには、じつを言えば、あらかじめ哲学者の頭の中で第一の方法が駆使され、全体的なイメージが作られているのでなければならない。叙述の方法として先生は第

二の地下鉄的方法を採用されているけれども、それ以前に、ジェームズの哲学の本質についての直観があり、その光に導かれつつ細部をくわしく取上げられたものと思われる。

＊　前掲書二八―四〇頁。

プラグマティズムの意味についてつぎのように述べられている箇所がある。「我々は実用といえばとかく荒物屋とかマーケットを連想する。しかしジェームズのいうプラグマティズムは必ずしもそうした意味での実用性にのみ関係したものではない。もちろん彼は我々の日常生活を決して軽んじてはいない。むしろ反対である。多くの哲学者が日常的な現実の生活から遊離して、絶対者とか無限なるものとかいった風な高尚な深遠な問題にのみ没頭しようとする傾向があるに反し、ジェームズはあくまでこの汗と塵にまみれた日常的な生活苦の世界に彼の哲学の中心問題を見出している。しかし彼にあってはそうした日常の生活そのものが決して単に衣食住といった物質の面からのみ捉えられてはいない。彼はむしろ我々のその日その日の生活を直ちに道徳的、宗教的な問題、いわばふかい内面的な魂の問題、と関係づけて捉えようとしている。このことは『信ぜんとする意志』、『宗教的経験の種々相』の著者としての彼を考えるだけでも、すでに十分に明らかな所であるであろう。*」これはまさにベルグソン的なプラグマティズム解釈に近いが、それと同時に、先生自身の哲学態度にも近いように思われる。ベルグソンによれば、多くの哲学者たちが見出す実在一般のすがたが「舞台において演ぜられる劇」にもたとえられるきっちりと計算された世界であるのに対して、ジェームズの見た実在は「我々の毎日そこに生きている人生」が示すむだの多い豊かな世界であり、しかもその中において直接に感じられかつ生きられる真理が、我々にとって最も大切な真理なのである。**このことはまた、つぎのような言葉と比較されてよいであろう。「哲学的主体はかかる「世間」を去ることによって苦闘的日常性の世界に真に自己を生かすべき母胎を認めるであろう……哲学は無産的日常性と有閑的日常性との自己矛盾を媒介とすることによ

って、日常性を超ゆると共に日常性を生かす如き弁証法的運動であると見ることは許されないであろうか。」*** これは哲学と日常生活との関係を問題にされたさいの言葉であり、そこにはきわめて興味深い問題についての深い洞察があり、先生の思想の単的な表現が見出されるのであるが、ここではジェームズ論との関係において取上げるだけにとどめておかなければならない。

* 前掲書一七四―一七五頁。

** 前掲書二八頁。

*** 「日常的生と哲学」、『人間探究』二一六頁。

その著『ベルグソン』においても先生は「ベルグソン哲学そのものの中核」からこの現代フランスの代表的哲学者をとらえようとされているが、この著作は同時にベルグソンの哲学全体にたいするすぐれた概観を与えるものでもある。その細部に立入ることよりも、ベルグソンと実存哲学について触れられている箇所*があることに注意したい。というのは、この問題について、最近パリで催された「ベルグソンとわれわれ」というテーマをもった哲学会において、二人の哲学者がそれぞれ「ベルグソンと実存哲学」（ベルナール・デルフガウフ）、「実存主義のベルグソン的基礎」（ポール・グルネ）と題する研究発表において注目すべき発言をしているからである。**

* 『ベルグソン哲学入門』創元文庫版、四二頁および一二七頁。

** *Bulletin de la société française de philosophie*, numéro spécial, *Bergson et nous*, Actes du Xe congrès des sociétés de philosophie de langue française, Paris 17-19 Mai 1959, pp. 91 et suiv., 131 et suiv.

それをくわしく紹介する暇はないが、たとえばそのうちの一人デルフガウフは、実存哲学者たちは一般にベルグソン哲学にあまり敬意をはらっていないけれども、じつは両者の間にはかなり近い関係があり、しかも実存哲学の中心的思想のいくつかはすでにベルグソンによって直接にあるいは間接に問題にされ、同じような方向に解決のいとぐち

が求められていた、と考えている。もちろん実存哲学とベルグソン哲学との間に大きな相違が認められることは言うまでもないことである。心理主義と生物学の重視とはベルグソニスムの大きな特徴であるが、実存哲学はそれらから脱脚してしまっている。しかし、両者の間に親近性のあることもまた事実であり、とくに自由と時間の観念については、実存哲学はベルグソン哲学の延長線上にあるということが注目されてよいであろう。こう言って、デルフガウフは選択の重要性、時間の統一性、情緒性という三つの点に関して、両者の間にいかに近い内面的関係があるかということを、ベルグソンの著作からの豊富な引用によって明らかにしているのである。

この問題はもっと掘りさげて検討される必要があると思われるが、いずれにせよ、かなり以前に今井先生が指摘された問題である。かくして、先生は二人の代表的な近代の哲学者を取上げ、それぞれ一冊の書物を割いてくわしく考察することによって、同時に先生自身の思想を深められたのである。このことはつぎに触れる政治哲学の問題についてのもろもろの省察にもあらわれている。

四

右に見られたように、数多くの純哲学的な著作とともに、政治哲学者としての先生は、政治哲学の領域においてもまた数多くの論文著書をものしておられる。ここでその全部にふれることはとうてい不可能である。比較的重要と思われるいくつかの著作と論文によりながら、今井先生の政治哲学の特色を考えてみたいと思う。

この領域における先生の努力は政治の本質を究明するために、人間における政治的なもの、政治における人間的なものを追求することにあるように見うけられる。

「政治ならびに政治哲学について」*という論文において、つぎのように述べられている。「政治哲学の対象は政治

である。政治と呼ばれる人間の一つの在り方である。そこから世界における人間の地位を究明しようとするもの、それが政治哲学に外ならない。**」政治哲学は「政治的な在り方においても在る人間の哲学的自覚である。**」しかも、政治は人間存在にとって余計なものではなくて、「人間の社会的存在にとって必然的・本質的なもの」である。ここからして政治の本質をきわめることは人間の本質を明らかにすることであり、また人間の存在を問うことは政治の本質を解明することである。言いかえると、政治哲学と哲学的人間学の結合のうちに、政治への真の反省ならびに人間についての真の省察が見いだされるのである。

* 『政治哲学の諸問題』（一九五〇年）所収。

** 前掲書四頁。

先生の政治哲学の根幹をなしているものは、人間のうちに明暗二側面があり、それに応じて政治そのものも二つの傾向をもつということである。人間が身体的・感性的存在であり、また人間をつくり上げているものがいわゆる「曲った木」であって力への意志が根絶されないかぎり、このような人間の世界には永遠に力の相剋、力への意志の葛藤がつづくであろう。非合理的、盲目的な力への意志が相互にあらそいつづけるであろう。そのかぎり、「人間は人間にとって狼」というマキャベリ的・ホッブス的な暗い側面を人間は持ちつづけるであろう。しかし、それと同時に、人間は理性的存在であり、非合理な盲目的衝動、力への意志を合理的に組織づけようと自ら努める存在でもある。したがって「人間は人間にとって聖なるもの」というセネカ的な明るい側面もまた、人間の本性の半面なのである。この曲った木はまっすぐになろうとする傾向をも持っているのである。「人間は元来そうした二面的・二義的存在なのである。*」こうした二つの側面から人間を捉えようとする方法は「政治と道徳」という論文においてもまた見られるところである。そこにおいては、シュプランガーの個性の理想的基本類型のうちとくに社会的人間と権力的人間との

二類型が取上げられている。なるほど、この二類型はまさに人間存在の相反的傾向、あたかも円の直径の両端のように、正反対の傾向を示すものである。社会的人間の特色は愛である。それは「自他の差別を没却し、自己の生命を他者の生命の中へと投げこみ、そして他者において自己を感ずること」[**]であり、しかも「他者に対する愛がまずあって、そこからはじめて自己がその真の価値において見いだされるのである。」[**]これに対して権力的人間は、権力への意志をその本質とし、「他者をすべて自己の下に屈服せしめようとする」[***]ものである。そこでは自己がつねに他者を支配しようとし、自己と他者の差別が強調される。権力的人間の根底は全き利己主義である。こうした権力的人間にまさにふさわしいものは政治であり、それに対して社会的人間のそれは道徳である。この二つは、基本的類型としては全く対立しているものである。しかし、やがて「人間平等性の要請に立脚する道徳的正義」の実現という点において、政治と道徳の結びつきの可能性が見いだされるに至る。[****]

* 「マキャベリズムについて」、『政治哲学の諸問題』四一頁。

** 『同志社法学』第二七号、一一頁―一二頁。

*** 前掲書一四頁。

**** 前掲書三〇頁以下。

こうした人間観に相応して、政治観においても、方法的二元論とでも呼びうるような見方が採用されている。言いかえると、まず政治における二つの相反的な極が見いだされ、ついでこの両極端が弁証法的に統一されることになる。「政治ならびに政治哲学について」においては、一方で政治の歴史は、階級闘争の歴史、暴力の、詭詐の、虐殺の、ギロチンの罪悪史であり、政治は「厭わしきもの、呪わしきものでなければならず、政治の真相は要するに「マキャベリズム」の一語に尽きると言えるであろう」と語られている。しかし他方理性の声に耳をかたむけるものとしての人間の政治は、「理想を現在に実現するという課題をもち、力の相剋を通じて「理想の実験」を行ってもいるのであ

る。人間は過去に制約されていると同時に、未来からも、彼自身のえがく未来像によってもまた動かされるものであり、こうした人間の主体的特性は政治的行動にもあらわれて、多くの迂路と後退と顚落とを通じて理想をその都度実験してやまない。「危機を未然に防ごうとするのが政治である。あるいは失われた平衡をできるだけ速やかに取り戻そうとするのが政治である。*」そのためには未来的な理想がいだかれ、それにもとづいて事がなされなければならない。それは「政治家の理性と構想力とに由来する一つの政治的仮説という意味」をもっている。「こうした仮説をもって現実の社会に臨み、そして現実の社会をしてその仮説の妥当性を実証せしめるもの、それがすなわち歴史的実験としての政治に外ならない。」「歴史的実験としての政治においては、過去的伝統を地盤として構想された未来的計画が、現在の危機を媒介し、そしてこの危機を克服するための手段として実験に供されるのでなければならない。こうした歴史的実験を、虚心に、あらゆる利己的感情から自由に遂行しうる人のみが、真に政治の主体たることを得るであろう。**」かかる歴史的実験という意味をもった政治の終局的理想は、文化的な創造的活動の面における自由と物質的・身体的な生存の面における平等であると言われうるであろう。さらに、生存の平等を確保しようとする政治は、「たんに人間がみずから人間となるための一つの足場であるにすぎない。***」のである。

* 『政治哲学の諸問題』一一頁。

** 前掲書一一―一二頁。

*** 前掲書一六頁。

かくして、政治は「享受における真の平等と創造における真の自由*」をもたらすものでなければならない。したがって、政治はそれ自身目的たることはできないであろう。「国家は、政治は、可能的実存の舞台であり、……帰するところ一つの手段**」にしかすぎないからである。

＊「三つの国家観」、『政治哲学の諸問題』二〇七頁。
＊＊「実存と政治」、前掲書二六〇頁。

以上かいつまんで紹介を試みたことからも知られるように、政治哲学の分野における先生の関心も主として人間と政治の関係から考察された政治の本質にその焦点が当てられていたと思われる。もちろん、政治の構造についての研究がないわけではない。『政治思想小史』の緒言においてうかがうことの出来る政治的世界の三圏的構造論＊や、いくつかの論文に見いだされる政治的主体と政治的基体との関係の問題＊＊もまた興味深いものである。しかし、ここで先生の思想のうちのいわば様々な枝葉の問題に立入ることは許されない。むしろこの小さな紹介においては先生の最近の重要な業績にふれなければならないであろう。

＊『政治思想小史』（一九五九年）一五頁以下。
＊＊「政治と道徳」（『同志社法学』二七〇号）、「社会における主体と基体との相関について」（同誌一三号）、「政治的世界における主体・基体・構造について」（同誌一五号）参照。

「政治的世界の形成原理としての自愛について」という最近の論文においては、その冒頭で「政治的世界を形成し、維持し、かつそれを無限に多様化する最も根源的な主体原理は何であろうか」という問いが出されている。「無限に錯綜した政治的世界の構造と過程」を明らかにするために、一年余にわたって同志社法学誌上に連載されたこの論文では、「自愛の人間学」と「自愛の政治哲学」が展開されるのである。＊そこでまず根源的自愛と呼ばれる「およそ一切の生形態の基底に潜む基体的原理」が見いだされる。これはあらゆる生物にとって最も根源的な自己保存の衝動である。この根源的自愛は求心的と遠心的という二つの方向に発現する可能性をもっている。根源的自愛といういわば一本の太い幹から二本の枝が延びているのである。それが求心的自愛と遠心的自愛である。求心的自愛は自己を世界の中心とし、自己を究極の自己目的とみなすのに対して、遠心的自愛は自己を他に対して周辺的なもの、手段的なも

のとみなす態度である。これはベルグソンのいわゆる「閉じられた魂」と「開かれた魂」との対立、シュプランガーのいう「権力的人間」と「社会的人間」の対立に対応している。前者は他から惜しみなく奪おうとする自愛であり、後は惜しみなく自己を与える自愛である。根源的自愛はこうした二つの発現方向をもつのであるが。その自然的傾向はむしろ求心的な方向に傾斜していると言われる。そしてそれを阻むものとして、共感、理性、刑罰への恐怖、報償への希望があげられている。しかし、問題はこうした二つの発現方向をもつ自愛がどのように政治的世界と関係しているかということであり、人間存在の基底に潜むこの原衝動がいかにして政治的世界を形成するかということである。

＊『同志社法学』三八号以下。

たとえばもしオッペンハイマーの言う、「国家は、その起源からみて……一つの勝利的人間集団によって、一つの被征服的人間集団に対して強制的に押しつけられる一つの社会制度である……そしてその支配は、勝利者による被征服者の経済的搾取以外に他のいかなる究極的意図をもたなかった*」という主張が妥当だとすれば、そこにはまさしく「自愛の求心化・自己中心化」という人間性にふかく根ざした傾向を見ることができるであろう。「政治的世界の枢軸をなすともいうべき国家を考察するにあたって、決して無視されがたい一つの主体的原理を形成するものは、明らかに人間の――個人ならびに集団の――原衝動ともいわるべきかの根源的自愛、およびこの自愛にとって極めて自然なかの求心極、自己中心極への傾斜の傾向、であるといわれなければならない。**」この求心極への傾きの中に、名声によって媒介される主我愛、富によって媒介される利己愛、さらに「つねに第一人者にして、他人にまさろう」とする権力意志の三つが区別されるが、いずれも求心的自愛の一つの形にほかならない。そして個は社会なしに生きることができないとすれば、社会成立の根底には人間の根源的自愛がひそみ、また「政府の、国家の、したがって政治

的世界の成立の根底には、人間の求心的自愛がひそむ」***のである。かくして、さらに支配と服従、自然法と実定法の関係、階級闘争といったもろもろの政治哲学的問題もまた、根源的自愛のさまざまな発現形式として説明されることになるのである。「『政治的世界』がいまだ存続する限りは、……この世界はどこまでも支配階級の求心的自愛と被支配階級の根源的自愛との血みどろな相剋の場として、いわば『自愛の弁証法』の歴史的発展の舞台として捉えられるのでなければならない。――これが政治についてのマルクスの中核的思想、すくなくとも、わたしの理解しえたかぎりでのそれ、であったのであり、そしてそこに、わたしは政治的世界の最も基本的な一つの相が鮮やかに浮き彫りされていることを看取せざるをえないのである。」****

* 『同志社法学』四〇号八五頁。

** 同誌八二頁。

*** 同誌一〇〇頁。

**** 同誌四七号三九頁。

以上きわめて大まかにではあるが今井先生の哲学と政治哲学とに関する労作の主なものをほぼ年代順に紹介した。その思想の根底にはつねに生への関心、人間存在への関心が一貫して流れており、その限りにおいて先生の哲学をニーチェ的な、あるいはベルグソン的な意味での生の哲学と呼ぶこともあるいは許されるであろうと思われる。

――クレルモン・フェランにて　一九六〇・一二・二八――